

〈コレクション展報告〉

二〇一八年四月十七日～五月十三日

百花繚乱 日本の漆工

本展では、当館に寄託されている寺社の漆工品三件、館蔵品の絵画一件を展示した。このうち、愛知・七寺所蔵の重要文化財《蓮池蒔絵懸子》（黒漆一切経唐櫃のうち）は、黒漆塗の地に金銀平蒔絵で蓮花がほどこされ、平安時代に公家の大臣安長らが奉納した一切経をおさめる懸子と知られる。蒔絵粒の大きさは不定形で、粉の密度は不揃いである。そのことがかえって、文様全体に大らかな印象を与えており、蓮茎や花弁のしなやかさを巧みに描写している。

次に紹介したのは、牡丹の彫りあらわされた、京都・南禅寺所蔵の重要文化財《鎌倉彫牡丹大香合》である。円筒形の木地に文様が彫られ、朱漆を塗って仕上げられた大型の香合で、寺院の什器を中心に多く見られる。鎌倉彫は、漆を幾層にも塗り重ねて、文様を彫りあらわす中国伝来の技法に影響を受けているが、本作は唐物の模造にととまらず、百花の王の力強さとみなぎるエネルギーとを大胆に表現している。

会場中央には、和歌山・熊野速玉大社所蔵の国宝《菊唐草蒔絵螺鈿手箱および内容品》（熊野速玉大社古神宝類のうち）を展示した。南北朝時代・明德元年（一三九〇）頃の作と知られるこの手箱は、祭神のための化粧道具セットであり、当時の天皇、上皇、足利将軍、諸国の守護大名らが分担して調進した、膨大な古神宝類の一部である。本作は金梨子地に、七色に光沢を放つ螺鈿と金蒔絵とによって、

徐々にほころぶ蕾や、のびやかに弧を描く蔓などがあらわされている。玉なる手箱の名にふさわしい、神々しい光に包まれた神宝である。

最奥に配された屏風には、鶴の群れと小雪のかかって霜枯れした葦とが描かれ、秋から冬へ移り変わるさまを我々に告げている。

寒さの残る春先の会期であったが、あえてテーマを初春に限定せず、四季の移ろいや植物に込められた神秘的な生命力を感じさせる展示を行った。

（菊地泰子）



展示風景

平成三十年四月十七日～五月十三日

洋画と日本の風土

明治以来、常に西洋の新しい芸術思潮の影響のもとに発展を遂げてきた日本の洋画壇であるが、日本の風土と切り離しがたい性質の主題、表現（日本画制作を含む）を通して初めて独自の画境に達した画家も少なくない。西洋の前衛的な絵画を憧憬し、その吸収に明け暮れたのち、日本人の手による新たな油画創造の模索に転じ、自己と日本（あるいは東洋）との関係性を問い直そうとした画家らの激しい葛藤がしのばれる。

岡田三郎助、鍋井克之、林重義、中川紀元、椿貞雄など、渡欧経験をもとに戦前から戦後にかけて活躍した作家らを中心とする二十四

点の油彩作品を展観した。人物（裸婦、神話、肖像、国内外風俗）、風景（海浜、山岳、田園、都市）、静物（卓上瓶花・果物）などさまざまな主題に浮かぶ日本風土の光と影をみつめ、画家それぞれの創作意欲と表現的個性の源を探った。

（知念理）



《野と子供》 中川紀元 昭和7年（1932）
本蔵館（白川朋吉氏寄贈）

平成三十年四月十七日～五月十三日

鉄・クロガネの美

昨年度開催した特別展「木×仏像」、コレクション展「古銅の美」に引き続き作品の素材をテーマとした展観。今回は鉄に注目し、全五十四点によってクロガネの美の世界を紹介した。

鉄湯釜（大阪・八幡神社）は延元五年（一三五〇）銘を持つ中世の貴重な遺例。重要文化財「極楽律寺」銘尾垂釜（本館蔵・中島小一郎氏寄贈）は在銘最古の天命釜として著名なもの。これに加えて芦屋釜・京釜、形象釜と当館コレクションで日本の鉄製釜の大きな流れを追った。また、岸本貫之助氏寄贈の鉄鐺三〇点を中心に、鏡、水注といった鉄製工芸品や鐺を象った根付などを紹介したほか、陶磁器の釉薬に用いられた鉄による化学変化の妙が彩をそえた。



《鉄金象嵌透彫竹露文隅取角形鐺》
江戸時代・17～18世紀
本館蔵（岸本貫之助氏寄贈）

昨年「古銅の美」で紹介した作品とはまた違った味わいのあること、用途の異なる器物が多いことに気づかされる。それぞれの素材の特性を活かしてきた先人の知恵であり、錆の違いをも含めて愛玩してきた好事家たちの趣向というべきだろう。ところで、当館金工品の顔でもある「極楽律寺」銘尾垂釜の銘を誤読してきたことに気づいた。詳細は本誌掲載の拙稿を参照されたい。

（児島大輔）

平成三十年五月十五日～六月十日

炎をまとう尊像―明王・天部―

本展示では、画中に「炎」が描かれる仏教絵画を紹介した。炎を伴う尊像の代表格である明王の作品を中心に、仏教の護法神である天部のうち火天像や多聞天像など、合計十九点の作品を展示。

明王とは、煩惱に捕らわれて迷う人々を屈伏させ教化する、密教特有の尊像である。その姿は怒りの形相で手には武器を持ち、燃え盛る火炎に包まれたさまに表現され、様々な現世的な利益を目的とした密教の修法で本尊として掛用された。

今回は不動明王、大威徳明王、愛染明王についてのコラムをそれぞれ、『宇治拾遺物語』（鎌倉時代）巻第三「絵仏師良秀、家の焼くを見て悦ぶ事」、『元亨釈書』（虎関師錬著、一三二二年）巻第十「無動寺相応」、『愛染王紹隆記』六、悉地速疾「東一条院」条（鎌倉時代）を参照し作成。コラムはケース内に配置し、鑑賞者が説話を通して各尊への理解が深められるよう試みた。

主な展示作品は次の通り。重文「不動明王二童子像」（太山寺蔵）、同「愛染曼荼羅図」（同）、同「不動明王像（黄不動尊）」（観音寺蔵）、同「多聞天像」（園城寺蔵）。

（石川温子）



展示風景

平成三十年五月十五日～六月十日

江戸禅僧の戯画 白隠と仙厓

特別展「江戸の戯画」に合わせた企画。江戸時代、機智とユーモアに富んだ絵画を画いたのは、耳鳥斎・北斎・国芳といった絵師たちばかりではない。高僧たちもまた、大衆の教化を進める手段の一つとして、数多くの書画を制作した。なかでも駿河の白隠慧鶴（一六八五～一七六八）と博多の仙厓義梵（一七五〇～一八三七）は、ともに臨済宗妙心寺派の高名な僧でありながら、それぞれ個性的な禅画を数多く残したことで知られる。

本展では、二〇二一年度に開館を予定している大阪中之島美術館所蔵の山本發次郎コレクションのなかから、両者のまさに「戯画」と呼ぶべき洒脱で楽しい作品十八件を選んで陳列した。彼らの禅画を理会するには、一般の書画で見られる画面構成や筆墨の妙を鑑賞するのみならず、そこに識された画賛を読んで、その内容を認識する必要がある。とりわけ白隠の作品には、深い含蓄があり、難度が高い。この度の展示にあたっては、全ての作品について賛文の釈文を付し、解説でその内容をできるだけ平易に記すよう努めた。

（弓野隆之）



仙厓義梵《布袋画賛》
江戸時代・19世紀
大阪中之島美術館

平成三十年五月十五日～六月十日

翰墨流香——清時代の書画—— かんぼくくるこう

本展では、中国清時代の書画として康熙・乾隆期から清末・民国初期までの館蔵および寄託の作品を三部に分けて展観した。第一部では、指頭画の名手である高其佩（一六六〇～一七四三）の花鳥画や揚州八怪の李鱣（一六八六～一七五六）と金農（一六八七～一六八七）の墨竹など、筆墨に妙趣のある作品を選び展示した。第二部では、十八・十九世紀の来舶清人の絵画として、彼らが長崎や京都に滞在した折に描いた作品など、日本での足跡や交友がうかがえるものを中心に選定した。第三部では、二〇一七年度の寄贈によって新収蔵品となった作品を中心に、特に清末から民国初期に活躍した書画家の作品を集めた。

清時代の書画は多様であるが、ここでは特に日本の画壇にも親しまれた文人画を主として構成した。技巧的な習熟よりも、運筆に心を配り内面に深化した作品からは、作家の等身の人間性を感じることが出来る。また、旧蔵者・中村由次郎氏と清末の名士たちの交際が偲ばれる書跡など、作品を通してみる文雅の交わりも、本展の見どころの一つであった。

（森橋なつみ）



高其佩<花鳥冊>のうち
清・康熙25年（1686） 本館蔵

平成三十年七月六日～十八日、七月三十一日～九月一日

赤松麟作

赤松麟作（一八七八～一九五三）は岡山県津山市出身の洋画家である。大阪で山内愚僊から油絵を学んだ後、東京美術学校に入学し黒田清輝に師事、同校卒業後は中学校（津・新宮）の教師を経て大阪朝日新聞社に入社、挿絵画家として活躍した。この間、風俗画、人物画を軸に文展での評価を確立するとともに、画塾を開き優れた弟子を多数育成するなど、大阪洋画壇の発展に主導的な役割を果たした。代表作《夜汽車》（東京藝術大学大学美術館蔵）をはじめ、その作品は現代にも色あせることのない質実なりアリズムの精華として評価される。

当館では近年も新たに赤松関係作品の寄贈を受けており、油彩以外にも女性像パステル画、大阪名所風景木版画、洒脱な淡彩花鳥画、絵巻画稿類、またブロンズ作品も加えて内容的充実をみた。大正期以来の油彩作品とこれら新収蔵作品を合わせた計18件により赤松麟作の多才な画業を振り返った。

（知念理）



展示風景

平成三十年七月六日〜十八日、七月三十一日〜九月一日

涼風颯々―夏のやきもの―

りようふうさつさつ

学芸員として働く中で、絵画や彫刻に比べて、やきものを美術館で鑑賞するというところに興味関心のある方は少ないと感じている。それはやきものの多くが芸術作品ではなく実用品として作られたということが関係しているのかもしれない。あるいはやきものには美術的観点のほか、考古学、歴史学、化学などさまざまな視点からアプローチできるため、却ってどこに焦点を当ててよいのか混乱するためかもしれない。そうした考えから、本展示はやきもの鑑賞入門として純粹に視覚的に楽しんでもいただけるよう企画した。展示期間が夏の暑い時季にあたることから、「涼やかさ」が見どころの作品を二つの展示室にわたり紹介した。

第一室には、中国・朝鮮の青磁、青白磁、白磁、藍釉を中心に、寒色系で透明感のある色あいや、硬質でシャープな造形のもの。第二室は、中国景德鎮窯や伊万里焼の染付磁器を中心に、雪や氷、水辺のいきものなど、涼風が吹き抜ける風景が目に見え、浮かぶようなデザインのものも展示した。その一角で、貝や蟹、海老などの水中生物をかたどった作品を集めて「やきもの水族館」を演出したのは担当者の遊び心である。

(杉谷香代子)



展示風景

平成三十年七月六日〜十八日、七月三十一日〜九月一日

古代イタリアの息吹―エトルスク美術―

エトルスク美術とは、紀元前八世紀頃よりイタリアの地に高度に発達した文化を開花させた、古代民族エトルリア人による美術活動や作品のことである。エトルリアでは、死後も生前と同じように豊かな生活をするを願って、地下邸宅のような墓を築いたが、現存するエトルスク美術の多くは、そうした墓地遺跡のほか聖域遺跡から出土した遺物である。

当館所蔵のエトルスク美術の多くは、昭和三十年（一九五五）・三十四年（一九五九）の二回にわたりローマにあるピゴリーニ先史民族学博物館（Museo Nazionale Preistorico Etnografico “Luigi Pigorini”）から寄贈を受けたものである。やきものを中心に総数百六十五件に及び、日本では数少ないまとまったコレクションである。本展示では、「エトルスク美術の幕開け ヴェイッラノーヴァ文化」「エトルスク美術の最盛期」「エトルスク美術の終焉 ローマ化していく時代」の三章に分けて紹介した。最盛期のブツケロ（黒陶）やテラコッタの瓦飾りに、エトルリア人もつ洗練された美意識や高い製作技術がうかがえる。

(杉谷香代子)



〈水注〉 ブツケロ 紀元前7世紀本館蔵（ピゴリーニ博物館寄贈）

平成三十年七月三十一日〜九月一日

日本・中国の仏教彫刻

中国南北朝時代から明時代にいたる千年間の仏教彫刻、そして平安、鎌倉時代を中心とする日本の仏教彫刻を四つのテーマにより展示した。

まず日本Ⅱ「仏像めぐり 京都・大阪・奈良・兵庫」では、当館にご寄託いただいている作品のうち、四府県に所在する峯定寺・成相寺・三室戸寺、専修寺・大門寺、新薬師寺・薬師寺、太山寺ご所蔵の仏像を紹介した。

中国Ⅱ「北魏の優品を中心に」では、当館山口コレクションを代表する南北朝時代北魏の小型像を、続く「山西・天龍山石窟将来像」では、今年、天龍山石窟が建築史家・関野貞により再発見されてから百年を迎えたことを記念し、当館所蔵の天龍山石窟将来像を一室に展示した。最後に「中国仏教彫刻の千年」として、中国彫刻の歴史の変遷をわかりやすく伝えるために南北朝〜隋・唐そして明時代までの代表的な仏像を年代順に配置した。

当館は世界有数の中国彫刻を所蔵するが、各地の寺院より多くの仏像をご寄託いただくことにより、このような特別展に匹敵するような展示が可能となった。そのご高配に御礼申し上げます。

(齋藤龍一)



木造《不動明王立像》
平安時代 兵庫・太山寺

平成三十年七月三十一日〜九月一日

BIOMBO! — 金と墨 —

BIOMBO (ビオンボ) は、ポルトガル語やスペイン語で「びようぶ」(屏風)のこと。日本の屏風絵が南蛮貿易を通じてはるか異国にもたらされ愛好された名残りをうかがわせる言葉である。珍奇な主題を描く折り畳み式の画面は、当時の異国人たちにはたいへんエキゾチックな印象を与えたことだろう。一方、彼らほどではないにしても、生活様式の変化が進む今日では、日本人の眼にも、伝統的な屏風絵が次第に見慣れない絵画となりつつある。

屏風絵の魅力を演出する「金と墨」の取り合わせを、①絵師の實力を示すシンプルかつ雄渾な筆致がそのまま迫力ある造形となる「総金地に墨」、②超俗性や清雅なムードを導き寄せ、繊細な装飾感覚を感じさせる「墨画に金泥」の二方向に分け、狩野山楽、長谷川等伯、海北友松、雲谷等益ら桃山から江戸時代の主に漢画系諸派による館蔵・寄託の優品八点を紹介した。

(知念理)



《鳥梟図》 長谷川等伯
江戸時代・慶長12年 (1607) 本館蔵

平成三十年七月三十一日〜九月一日

動物を描く―近世・近代の日本絵画―

本展示は、展示期間が夏休みにあたることから、子どもたちも親しみやすい動物を描いた作品を見せようと企画したものである。また、平成三十年が成年にあたることから、当館の収蔵品第一号で橋本関雪の代表作の一つとして知られる「唐犬」を年内に展示したいと考えていた。そこで、この機会に担当分野である近世および近代の日本画から動物を描いた作品を選んで展示することにした。

近世絵画の作品としては、森徹山「寒月狸図」、岸駒「牡丹孔雀図」、関蓑洲「象図」など、江戸時代後期に京坂で活躍した絵師を中心に十三点を展示した。近代日本画は、前述の「唐犬」のほか、同じく関雪の「相牛図」（個人蔵）、金島桂華「朝霧」、榊原紫峰「朝靄」の四点だけであるが、いずれも大画面で見応えのある作品を選んだ。また、展示全体を通して、できるだけバラエティーに富んだ動物を楽しくもらせるように心掛けた。

やや異色なものとして、塩川文麟「四神四獣図」（個人蔵）も展示した。四神（青龍・朱雀・白虎・玄武）を、祇園祭の南観音山を飾る天水引てんみずひきの下絵として、安政五年（一八五八）頃に描いたものである。

（秋田達也）



展示風景

平成三十年九月二十二日〜十月二十一日

おおさかの仏教美術1

大阪は六世紀に仏教流伝の入口となった難波津、聖徳太子が建立した四天王寺を擁するなど、日本仏教史上重要な地の一つである。それから時を経ること約一四五〇年、長い時間に醸成された信仰を映し出す、様々な文化財が現在大阪府下の寺社に伝来している。

本展示では、当館が大阪府下の寺社からお預かりしている作品の一部をご紹介します。浄土信仰、釈迦信仰、祖師信仰に纏まとわる絵画、彫刻、金工作品など、合計十五点を展示。

今回はこれらの作品を通して、国内外からの来館者に大阪の寺社について知ってもらうと同時に、近畿一円の寺社より文化財を寄託され、寺社に代わって保存と公開を行うという開館以来の当館の事業についても理解を深めてもらうことを目的として企画した。

主な展示作品は次の通り。重文

「文殊渡海図」（叡福寺蔵）、同「当麻曼荼羅」（実相寺蔵）、同「仏涅槃図」（長宝寺蔵）、同「澤庵和尚像」（祥雲寺蔵）、同「金銅菩薩半跏像」（観心寺蔵）、同「銀製鍍金光背」（四天王寺蔵）。

（石川温子）



展示風景

平成三十年九月二十二日〜十月二十一日

山口謙四郎の眼

山口謙四郎は山口銀行（現・三菱UFJ銀行の一部）の創業者である三代目山口吉郎兵衛の四男として、大阪船場で生まれた財界人である。その一方で中国石造彫刻を中心に多くの作品を蒐集し、当時から海外でも知られたコレクターでもあった。大阪市立美術館は没後ご遺族よりその彫刻百二十五点を得たのち、さらに中国陶磁・金工など九十九点を収蔵している。

今年、山口コレクシヨンの収蔵から四十年を迎えたのを記念し、中国陶磁・金工を中心とする作品群を二展示室にわたって紹介した。このように山口コレクシヨンの各ジャンルを一堂に展示する機会は数十年ぶりである。

生前、山口謙四郎は自らの蒐集について多くを語っておらず、また購入記録のような書類も失われている。しかしながら展示室に並ぶ作品群が——それらは制作された年代・地域も様々であるが、都ぶりの作品よりもむしろ少数民族の文化を含む地方性色濃い作品が多

いこと、華美ではなく渋く趣のある作品が多いことなど——山口謙四郎の眼差しを雄弁に語りかけていた。

（齋藤龍一）



〈黄釉緑彩 水注〉
長沙窯唐時代
本館蔵（山口コレクシヨン）

平成三十年九月二十二日〜十月二十一日

人物を描く——美人画と自画像——

本展示は、肖像芸術をテーマとした特別展「ルーヴル美術館展」と展示期間が重なっていたため、日本における人物画をあわせて展示することで肖像に対する理解を深めてもらえればと思い企画したものである。また、平成二十九年度に修理された中村貞以「芸能譜」の御披露目および、平成三十一年度に修理予定の北野恒富「星」の現状での見納めの機会を設けたいと考えていたことから、近代の日本画家たちによる美人画を中心に展示することとした。そして、これらの美人画を同時代の洋画家たちによる自画像と比較展示することで、理想化された美人画と現実と向き合う自画像を対比させたいと考えた。

美人画の作品としては、前述の二作品の他、当館の代表作の一つである上村松園「晩秋」、鏑木清方「春雨」（個人蔵）、北野恒富「夜桜」など計六点を展示した。洋画は、中川一政「自画像」、村山槐多「自画像」、田川寛一「二十歳の自画像」など六点である。それらをつなぐものとして、近代大坂で活躍した女性日本画家・島成園が自らを描いた「無題」および「自画像」の二点を配したところが、本展示の一つのポイントである。

（秋田達也）



展示風景

平成三十年十一月二十七日〜三十一年一月十四日

江左の風流―六朝石刻書法―

三世紀から六世紀にかけて、長江東岸の建業・建康（今の南京）を都に、呉・東晋・宋・齊・梁・陳の六つの漢民族王朝が相継いで興隆した。貴族たちは爛熟した文化を育み、王羲之らが尺牘（書簡）などに妍妙な書を競っていた。また南北朝時代とも呼ばれる当時、北方では石碑などに刻された書法が盛んに行われた。

十八世紀前半、阮元は「南北書派論」で「南派は乃ち江左の風流、疏放妍妙、啓牘に長ず」「北派は則ち中原の古法、拘謹拙陋、碑榜に長ず」と両者を判然と区分した。しかし、同世紀末になって康有為が『広芸舟双楫』で指摘したように、禁碑令が出たために数こそ少ないが、南朝でも優れた石刻の遺例が存している。

この度は、康有為も取りあげた「谷朗碑」「天発神讖碑」「禅国山碑」「葛祚碑」の呉碑四種から、梁の「太祖神道闕」「瘞鶴銘」「天監井欄題字」「蕭憺碑」に至る貴重な南碑の遺例十一件と鏡銘一件を陳列した。本展は

また、平成二十九年
度に修復を終えた
「天発神讖碑」整本の
初公開を兼ねたもの
であった。

（弓野隆之）



《天発神讖碑》（部分）
呉・天璽元年（276）
本館蔵（師古齋コレクション）

平成三十年十一月二十七日〜三十一年一月十四日

辻 愛造を歩く―昭和風景アンティーク―

辻愛造（一八九五〜一九六四）は大阪市生まれの洋画家である。初め赤松麟作に師事、その後上京して太平洋画会研究所で学んだのち大阪に戻り、「艸園会」の結成に参加した。岸田劉生を中心とする「草土社」の強い影響のもとに制作し、院展、春陽会のほか、洋画部が設けられた国展（国画創作協会、のち国画会）に京阪神の名所・遊楽地を活写した風俗画で連続入選し、ノスタルジーとモダニズムが交じり合う個性豊かな画風を確立した。その後、次第に辻の制作は都市の喧騒を離れ、ひなびた農・漁村風景に題材を求めて風景画家としての新境地を開いていった。

《道頓堀夜景》（昭和四年）
以外ほとんどが未紹介であつた昭和初期の風俗画、戦後の風景画を中心に、木版画や素描、スケッチなどの資料類を合わせた総数四十四件を紹介し、この画家のライフワークともいべき昭和風景―都市と自然―の魅力を振り返った。

（知念理）



展示風景

二〇一九年二月一六日～三月二十四日

節句を彩る ― 人形と漆工 ―

本展では、昨年に引き続き、雛人形をはじめとする、京都を中心に製作された人形を展示した。人形製作の本場である京都において、数々の名品を生み出してきた丸平・大木平藏の人形は、繊細な造形と華麗な衣裳などが見どころの一つとなっている。また、端午の節句で飾られる五月人形の勇壮な姿や、節句にちなむ印籠・根付・杯などの漆工品も展示した。

このうち本紙で取り上げている杯は、江戸時代後期に名を馳せた蒔絵師、原羊遊斎（一七六九―一八四五）と、同時代に活躍した琳派の絵師、酒井抱一（一七六一―一八二八）との合作。目にも鮮やかな朱漆の地に、薄肉高蒔絵で五節句にちなむ文様があらわされている。一番小さな杯から順に、桃（三月三日）、菖蒲と蓬（五月五日）、梶（七月七日）、稲（一月七日）、菊（九月九日）の文様となっている。花の裏表や、茎の根元から先端にかかる部分に、金粉と青金粉



酒井抱一下絵・原羊遊斎作
《草花蒔絵五ツ組杯》
江戸時代後期
本館蔵（森コレクション）

とをグラデーシオン状に蒔きほかしており、草花の表情を繊細に描き分けている上品な杯である。うららかな春に先駆け、心躍るハレの日の魅力を紹介した。

（菊地泰子）

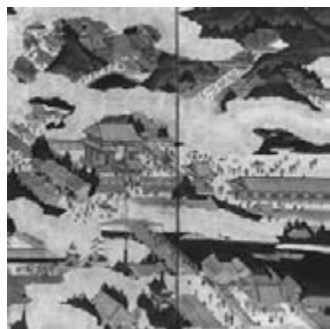
平成三十一年二月十六日～三月二十四日

都市を描く―洛中洛外図と名所図会―

本展示は、近年新たに寄贈を受けた「洛中洛外図」（六曲一双）を紹介する機会を設けたと思います、かねてより計画していたものである。この「洛中洛外図」は、いわゆる佛敎大学本系統のもので、現存する同系統の「洛中洛外図」が20件あまり知られており、江戸時代中期に多く描かれたと考えられている。また、当館には田万家旧蔵本として知られる江戸時代初期の「洛中洛外図」が所蔵されており、これとともに展示することで両者の相違点を紹介できればと考えた。

さらに、当館では江戸時代後期を中心に刊行された「名所図会」のまとまった寄託を受けている。京都を紹介した『都名所図会』をはじめ、『都林泉名勝図会』や『花洛名勝図会』など、名所を文章と挿絵で紹介した「名所図会」もまた、「洛中洛外図」のように近世の都市やその周辺の様子を説明的に紹介したものであり、両者をあわせて展示することで江戸時代の都市の諸相を描いた作品について理解を深めてもらいたいと考えた。屏風と冊子、肉筆画と版画というように両者は大きく異なるが、一つ一つの名所に注目することが鑑賞のポイントの一つである。

（秋田達也）



《洛中洛外図》（右隻部分）
江戸時代
本館蔵（下村裕氏寄贈）